

※本編をお聞きになった後にお読み下さい

あなただけの瞳 前日譚

瞳の光

やさしい狛犬

私は瞳。あの子も瞳。その子も。あそこにいる子も。

ここにいる女の子はみんな瞳。違う顔、違う肉体を持っているにも関わらず、みな同じ名前を持っている。

ずらりと並んだ扉の中は全てが一樣に真つ白だ。壁にはシミひとつ許されない。それらを管理するのが私たちの仕事。そこで暮らす先生たちの世話も、私たちの仕事。

「瞳、瞳」

扉の向こうから声がする。それは先生の声。でも私の求める先生の声ではない。

たくさんいる瞳たちの中から、彼に呼ばれたただ一人の瞳が「はい」と返事をして扉の向こうへと消えていった。

先生たちにも特別な瞳がいるのだ。私たちそれぞれに特別な先生がいるように。

ブー、とブザーが鳴った。天井に提げられた細長い電光掲示板

——確か以前はファミリーレストランで使われていた物と聞いた
——に赤い数字がぱつと表示される。

私はその数字を見て小さな胸がどきつと高鳴るのを感じる。身中の血液が熱くなって、手足の指先にまでよく巡るのを感じる。他の瞳が椅子から立ち上がったのを私は手で制した。「あの部屋は、私の先生だから」

彼女は素直にすくと椅子へ座り直すも、納得のいつていない表情だ。「どうしてあなたが呼ばれているとわかるの？ 名前を呼ばれてもいないのに」

「わかるわ。先生にとつての瞳は私で、私にとつての先生は彼だけだもの」

言い終える前に私は廊下を駆けていた。先生の部屋へと一番にたどり着く瞳は私でなければならぬ。

さつきはついあんなことを口にしてしまったが、本当は先生に

とつての瞳が何人かいることを私は知っている。

潑刺とした声で明るく喋る瞳。溢れんばかりの笑顔を誰にでも振りまく瞳。どちらも私とは全く違う女の子だけれど、先生はみな同じように「瞳」と呼ぶ。

私はその名前に私だけが含まれることを望む。

「……先生、お呼びですか」

瞳です、と、あなただけの瞳です、と心の内でそう告げながら私は彼の部屋へと入った。入るなり、つんとした匂いが鼻を掠める。

——そうか、と私は知った。

「大丈夫ですよ。すぐに綺麗にしますから。……先生は何も悪くないです。私が来るのが遅かったせいですね。ごめんなさい」

先生の軀に掛けられた布団をそつとめくり、濡れた衣服と下着を手早く交換する。新しい物はすぐに用意できるよう、常にベツ

ドの下へと収納されている。

これまでに何度も繰り返されてきたことなのに、先生は未だ慣れないようだった。私に軀を清められる間、ずっと恥ずかしくて情けなくて堪らないように、唇を嚙んでそっぽを向いている。

私は「先生」と優しく声をかけ、赤らんだ頬を指先で撫でた。かさついた皮膚の感触が痛々しい。

「何も恥ずかしいことなんてないですよ。先生は人間として当然の行為をただけです。それに先生の身の回りの世話をすることは私たち——いえ、私の仕事ですから。だから、そんな顔しないでください」

透き通った光を持つ先生の瞳には涙が滲んでいた。

私は顔を寄せると、睫毛に溜まった涙の滴をちゅつと吸う。先生の臉がぴくつと跳ねる。「先生、先生……私だけの先生……」
「眩しき、愛を囁きながら先生の額を、頬を撫でる。」

そうすると次第に安堵したのか、先生はすうすうと寝息を立てて眠ってしまった。泣き疲れた赤ん坊のようだ。

私はくすりと微笑んで、その寝顔を飽くことなく見つめた。

可愛い先生。愛しい先生。私は彼の本当の名を知らない。初めてこの部屋で会ったとき、彼にはもう名前がなかった。ただ「先生」とだけ。ここに大勢いる先生たちがまたひとり、増えただけ。

……でも、私に「天使かと思った」と言ったのは、彼だけだった。私に触れ、ベッドの中へ引きずり込み、すまない、と何度も口にしながら私に新しい世界を見せたのも、彼だけだった。

あ有的时候、私にとっての「先生」は彼だけになり、私は彼のだけの「瞳」になることを決めた。熱く濡れた血と共に私は大人になった。それは同時に彼との別れを意味していた。

「先生……あなたは大人なのに、まるで赤ん坊みたいな、無垢な寝顔で眠るんですね……私が先生の母親だったら、ずっとこうし

て見守れるのに……」

もう随分とやせ細ってしまった先生の手にそつと指を絡ませると、ぎゅつと強く握られた。

痛いですよ、先生、と言い掛けて、そういえば先生もあるときちよつと痛そうだったな、と思い出し、なるほどこんな感覚だったのかと知る。

そうしてもし先生が痛みを我慢してくれたのなら、それは愛する者に与えられた苦しみだから——と考えると、私は暗く白いこの部屋で、僅かな光を見たような気がした。

了

二〇二四年二月二十四日

やさしい狛犬